

実践報告

わが病院看護自慢

『認知症者の「その人らしさ」を支える療養環境づくり ~多職種連携~』

野村 仁美

独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院

日時：2018年9月25日(火) 13:30~16:30

会場：独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院 アイデアホール

参加者：医療機関の看護師 17名

- 内容：1. 講演：認知症者と治療環境について(講師：認知症看護認定看護師)
2. 安全環境ラウンドの取り組みについて(理学療法士、医療安全管理者)
3. 院内見学(院内デイケア、安全環境ラウンド)
4. 職種間の連携について(管理栄養士、看護補助者による活動報告)
5. 意見交換

2018年9月25日(火)、当施設において『認知症者の「その人らしさ」を支える療養環境づくり~多職種連携~』をテーマに、わが病院看護自慢を開催し、近隣の医療機関から17名の看護師の方々にご参加をいただきました。

まず、認知症者と治療環境について認知症看護認定看護師による講演を行いました。必要な治療を終え、早期に馴染みの場所で生活できるよう、「本人が持っている能力を活かす・奪わない環境」「本人の意思が尊重される環境」について、説明させていただきました。日常生活動作を行える環境=動かないでいい環境をつくらない、トイレで排泄したい人は排泄する等、何も特別なことではないということを再認識する機会となりました。

(写真①)

続いて、安全環境ラウンドの取り組みについて医療安全管理者及び理学療法士による実践報告を行いました。本ラウンドは以前転倒転落ラウンド



写真① 講演

と称し、安全重視のラウンドとなっていました。平成30年度より日常生活動作を安全に行える環境重視のラウンドへとシフトチェンジしています。状況によっては認知症看護認定看護師や皮膚・排泄ケア認定看護師が同席することもあります。理学療法士による専門的知識に基づくアドバイスにより病棟看護師の思考の幅が広がり、身体拘束の

連絡先：野村 仁美

独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院
〒920-8610 石川県金沢市沖町ハ-15

最小化等、患者を多方向からみることでもたらされる効果の大きさを共有しました。

その後、①安全環境ラウンド見学、②院内デイケア見学、③職種間の連携（管理栄養士・看護補助者）について、3グループに分かれて参加していただきました。①安全環境ラウンドでは、ベッドサイドにおける患者の日常生活動作の確認、センサーマットの必要性の有無・効果的な使用方法等を踏まえ、職種間で言いたいことを言い合える生のやり取りを見ていただきました。（写真②）



写真② 安全環境ラウンド

②の院内デイケアでは、看護師のみならず、作業療法士や看護補助者等が協働して作り上げる楽しみの空間を見ていただきました。（写真③）③の



写真③ 院内デイケア

職種間の連携については、管理栄養士と看護補助者の立場から、その実際についてお話をさせていただきました。管理栄養士は、食事の時間帯に行っている「ミールラウンド」を中心に発表を行いました。実際の目で摂取状況・量を把握し、食事量・形態の適正化に向けて、言語聴覚士と協働してタイムリーな介入を図ってくれている現状は頼もしいの一言につきます。参加者からも、管理栄養士が患者の顔がわかる距離にいることのメリットについて好評価をいただきました。続いて発表した看護補助者ですが、現在地域包括ケア病棟に勤務しています。今回のような発表の場は初めて

であり、そのプレッシャーは計り知れなかったと思いますが、あることをきっかけに自らが「チームの一員になりたい」「チームに貢献したい」という思いを抱くようになった、その経緯から話してくれました。それはある豪華客船に乗った時のこと、掃除をしていた若い女の子が、それはそれは素敵な笑顔で「こんにちは！」と声をかけてくれたそうです。それを見たとき、職員一人一人のおもてなしの心がこの船を支えているのだと感じ、自分にも病棟でできることがあるはずだと奮起したそうです。発表では、急性期病棟から転棟される患者さんに少しでも居心地の良い空間を与えてあげたいというおもてなしの心について率直に伝えてもらいました。試行錯誤を繰り返しながら、院内デイケアの企画・運営に携わり、やりがいをもって勤務している彼女の姿に私たち看護師は日々感謝しています。結果的にこの看護補助者の発表が一番参加者の皆さんの関心を引き付けたように思います。どちらの医療機関でも看護補助者の活用という点で課題をお持ちなのだと感じました。当施設でも、彼女のような看護補助者の存在が全体の質の底上げにつながってくれることを切に願っています。

最後の意見交換会では、多職種連携の極意に関する質問があったように思います。全職種すべて一方向に足並みそろえて…というわけにはいきませんが、患者のためにどこどこがタッグを組むとより強力か？キーマンとなる人材をピックアップし、そこから（良い意味で）波紋をひろげ、理解者を増やしていくことが一つの方策かと思えます。また、中にはこれを機会に「自施設にもどったら、看護補助者がどんなことを考え、どんなことをしたいのか聞いてみたい」という声があり、大変うれしく思いました。

今回、本企画にお声をかけていただき、最初は“おこがましい”との思いでいっぱいでしたが、この機会に自施設の良い所を再発見することができました。参加者の方から、“職種間のチームワークが良く、患者さんのことを皆で良くしていきたいという思いを感じた”等のお言葉をいただき、今後の励みとなりました。

病院は生活者としての患者さんのこれまでの生活とこれからの生活をつなぐ場です。今後も多職種が連携し、急性期治療の提供はもとより、生活機能を維持・回復できる療養環境づくりにつとめていきたいと考えています。